1993. 4. 15

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD研究会会報　第5号

事務局：長瀬総合療育研究所内　〒164 東京都中野区東中野5-5-10 R.H.S2F
TEL&FAX. 03-3360-1855

学習障害の判りにくさ

静岡県立こども病院
長　畑　正　道

学習障害の問題が、ようやく社会的にも大きく問題になり、広く関心が持たれるようになってきた。しかし、学習障害を理解してもらうことのむつかしさも、逆に大きくなってきたように思われる。学習障害で一番なやんでいるのは子ども自身であり、またその親である。こういった社会的な認識とのずれの問題にこの頃とくに悩ませられる。そして説明すればするほど誤解の方が広がり、一向に溝が埋められないもどかしさにかられる。

こういったことが生じてくる背景にはいくつかの要因があるが、心にかかっていることをここで取り上げてみたい。その1つに学習障害の障害という言葉に理由がありそうである。障害というとつい障害児が念頭に浮かぶ。視覚障害、聴覚障害、運動障害、自閉性障害、知能障害といったことから連想されるのは、一見してその障害が誰にでも認識できるということである。しかし学習障害の場合、知的には決して低くはなく、それでいてある特定の能力だけが低いだけであるので、一見してそれと判らない。そのため周囲からどうしても援助の手をさしのべないではいられないという気持になりにくいという状況が生まれてしまう。

いま1つは学習障害の障害の質の問題がある。私は学習障害の基本障害は神経心理学的障害と考えているが、神経心理学的障害の判りにくさという問題がある。成人の場合、例えば純粋失読では文字が読めなくなる。しかし文字は書け、自分の書いた文字も読めない。拮抗失行では、右手が目的にかなった行為をすると、左手がそれを邪魔するような行為が自然におこってくる。「そんなばかな」と思われるようなことが生じてしまうのが神経心理学的障害の特徴ではないかと思われる。ここに理解のむつかしさがある。さらにつけ加えると、エジソンのような発明家も学習障害であったことが知られている。逆に学習障害があったために発明家になれた一面も否定できない。

本研究会もこのような点をふまえながら、研究を一歩一歩進めて行くことが期待される。